

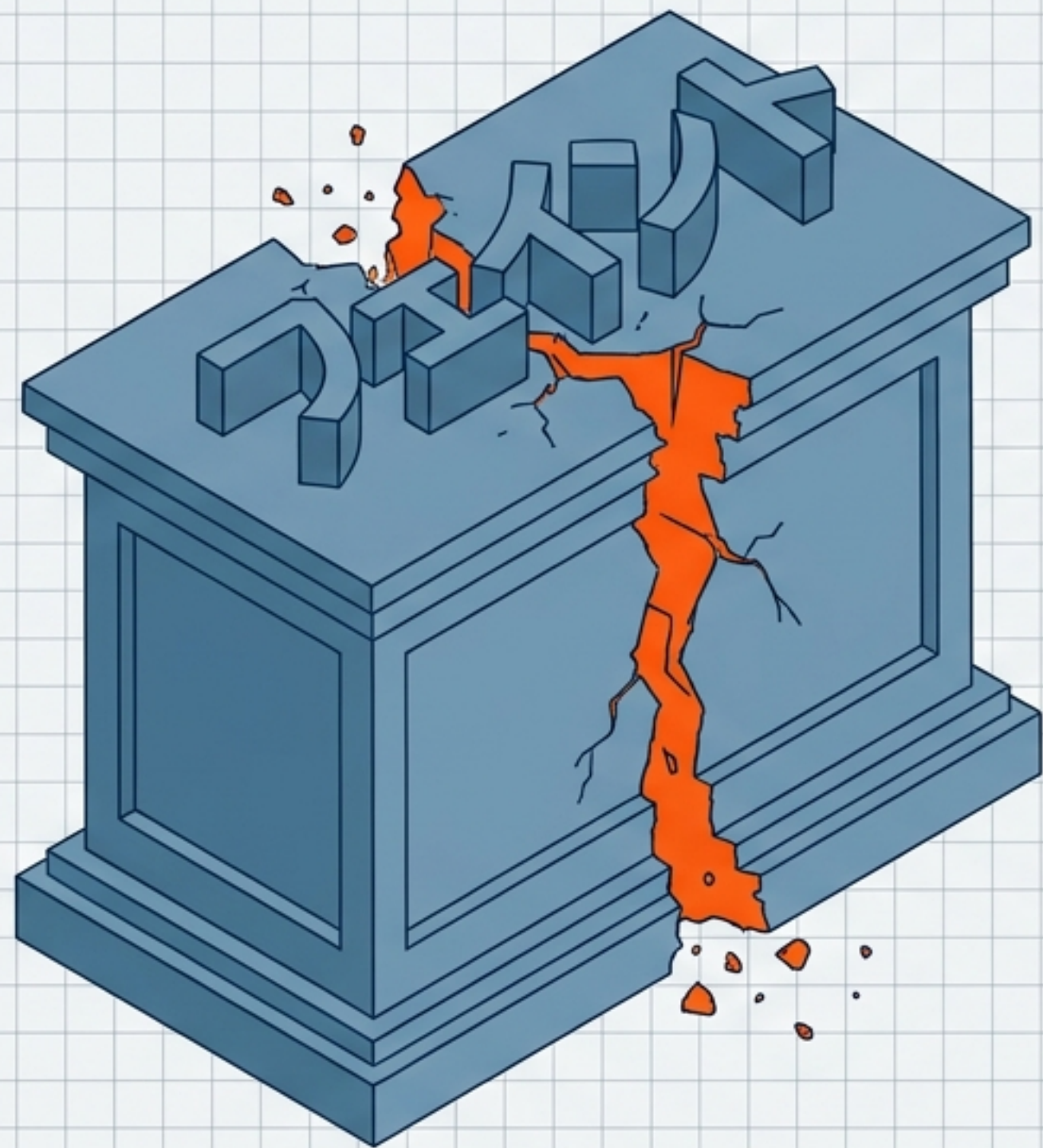
駆け引きを捨てよ、時間を支配せよ



三流は駆け引きし、一流は時間を奪う

物理学と客観的データが導く、勝負の絶対真理

フェイントという『甘美な錯覚』

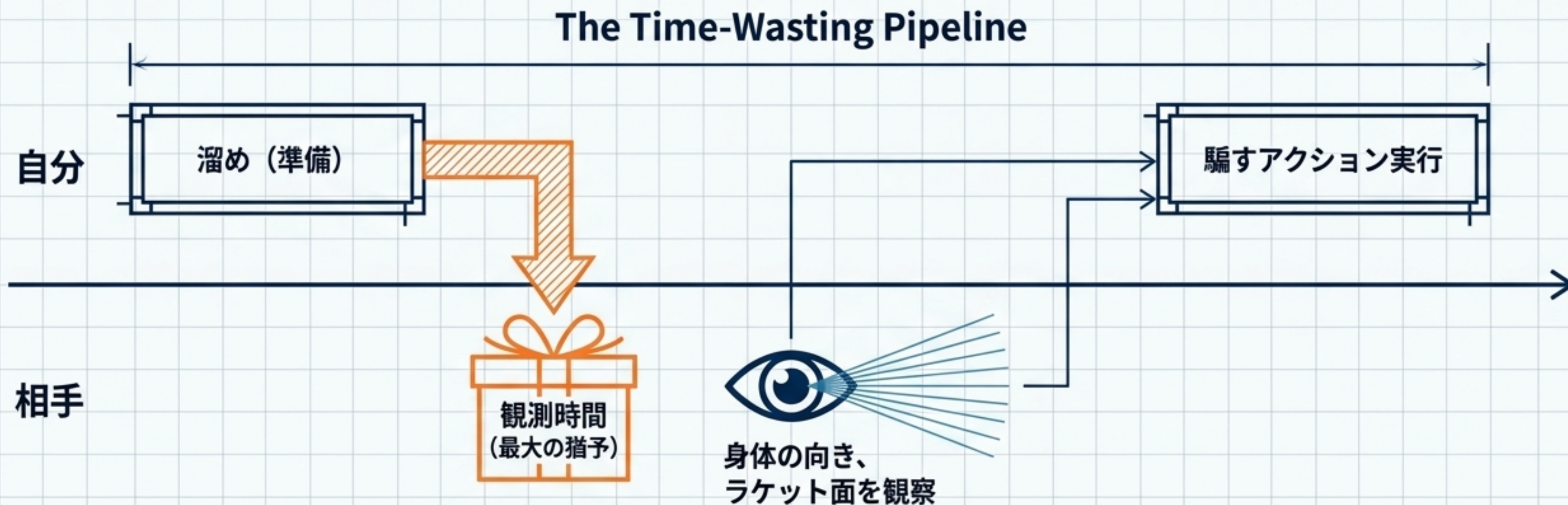


一般の常識：相手の逆を突く。ラケット面を隠す。足を止めさせる。『高度な技術術である』という思い込み。

絶対的な矛盾：圧倒的に勝っている者が、なぜわざわざ相手に『猶予』を分け与える必要があるのか？

結論：華やかな演出や『相手を欺いた』という快感は、本質的な強さからかけ離れた危険な自己満足に過ぎない。

自滅のメカニズム：観測時間という『死のプレゼント』



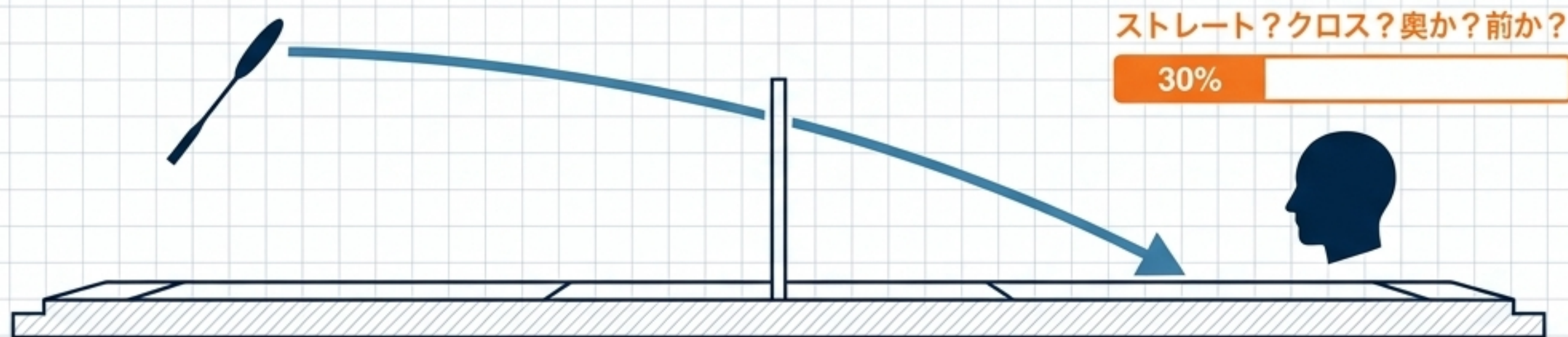
フェイントの成立条件とは、『相手に十分な観測時間を与え、その観測結果を裏切ること』。
自分に主導権があるにもかかわらず、自ら相手に思考する時間を与えている、極めて皮肉な自滅構造である。

一流の絶対法則：冷酷な時間の破壊

$$T_{\text{flight}} < T_{\text{think}}$$

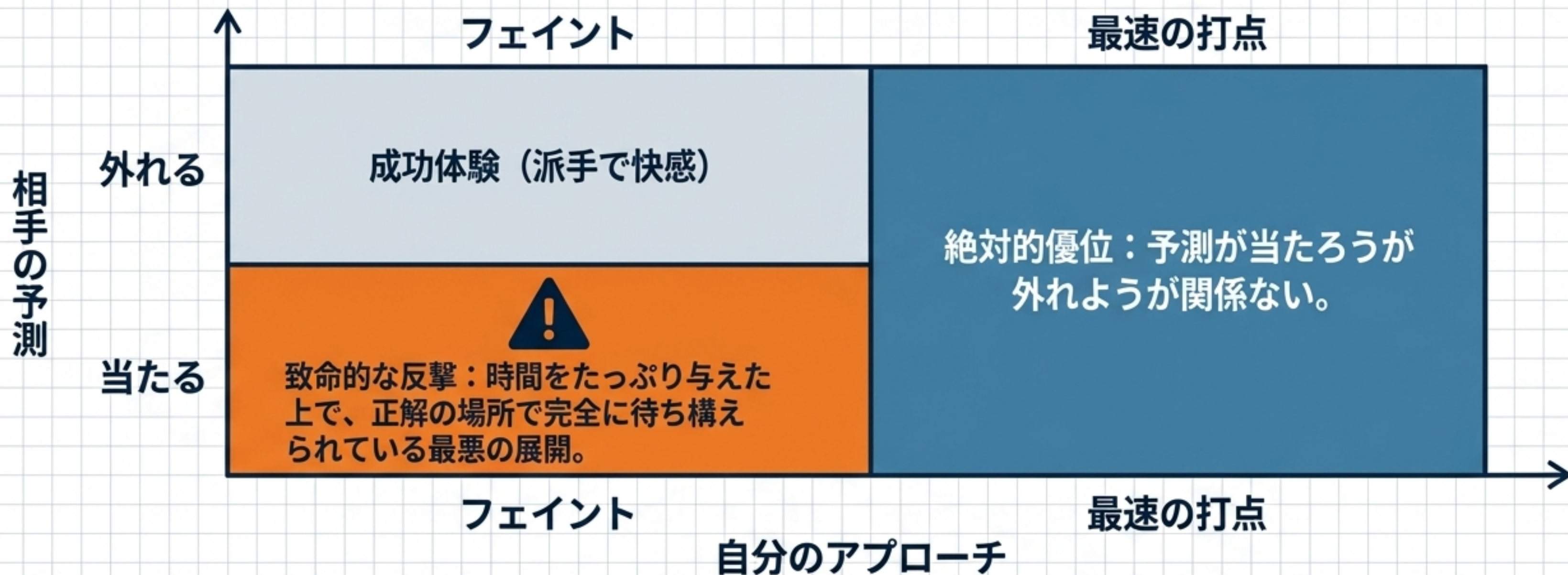
T_{flight} ：シャトルの到達時間

T_{think} ：相手の思考時間



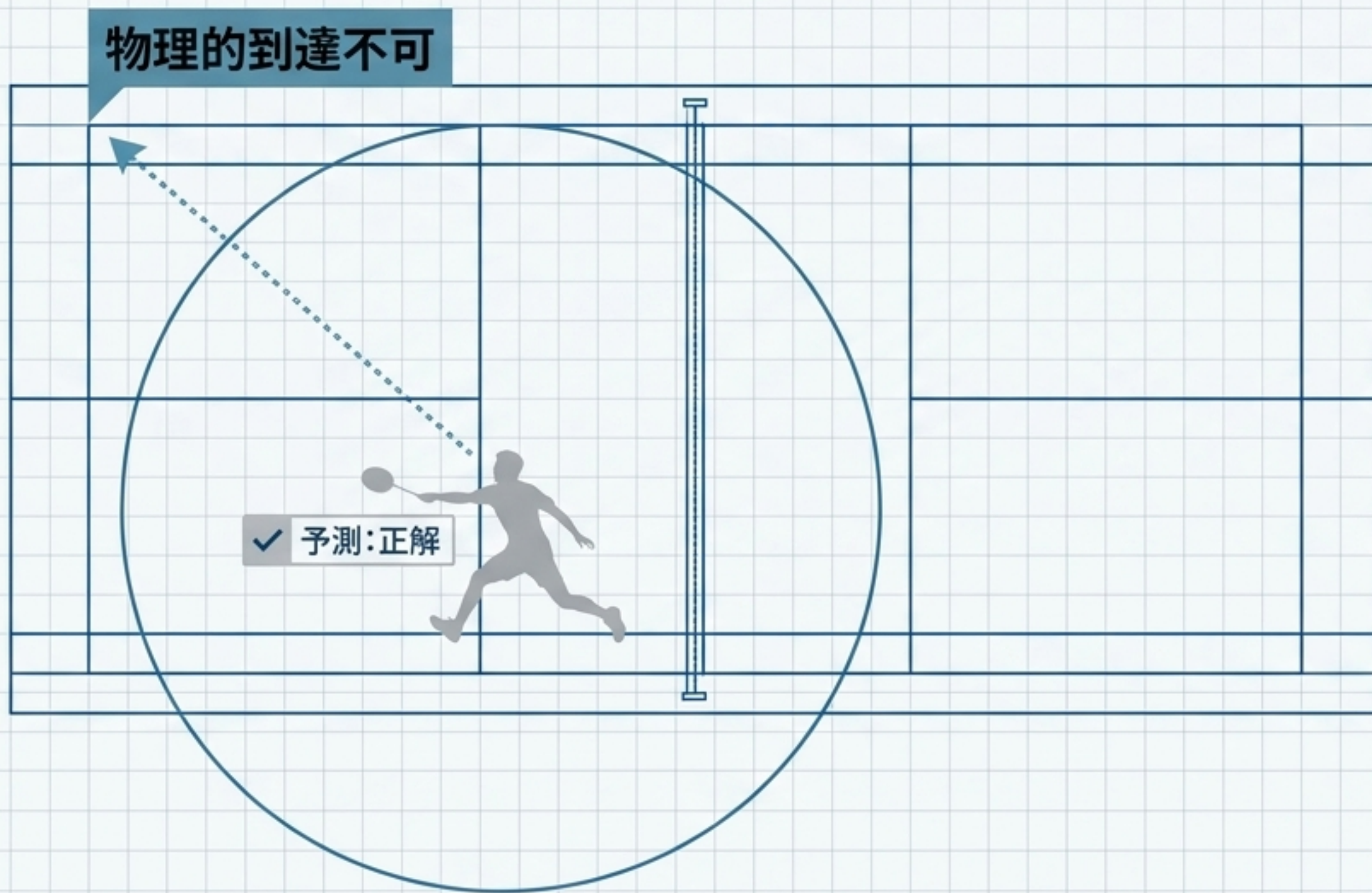
一流は相手の予測を外そうなどと考えない。そもそも予測という思考に使える時間そのものを完全に消し去る。高い打点から最短の準備で放ち、相手の判断が完了する前に空間へ飛ばし切る。

予測の罠：不確実なリターンに依存するな



フェイントとは『相手の予測が外れること』に全責任を依存する、極めて不安定でハイリスクなギャンブルである。

圧倒的強者の領域：『読まれても間に合わない』



真に強い配球とは、
『読めない配球』ではない。
『たとえ完全に読まれていても
届かない配球』である。

クロスに来ると分かっているにもかかわらず届かない。ストレートだと見抜いていても打点を下げさせられる。戦うべき真の相手は敵の『予測』ではなく、絶対的な『時間』である。

視点の転換：心理（あやふや）から物理（客観）へ

【三流の視点：心理】

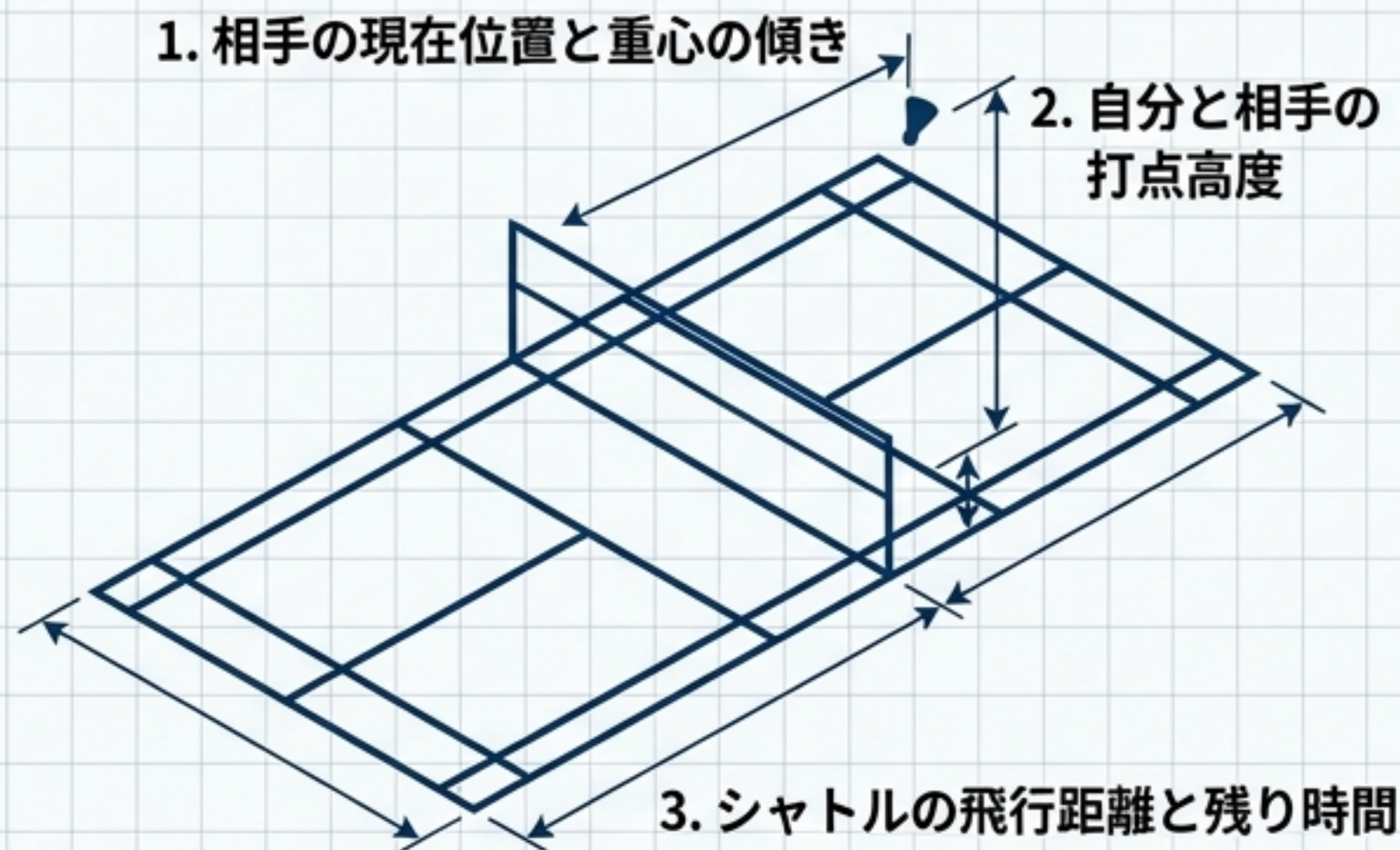
ストレート警戒？

次は逆を突こう

裏をかく

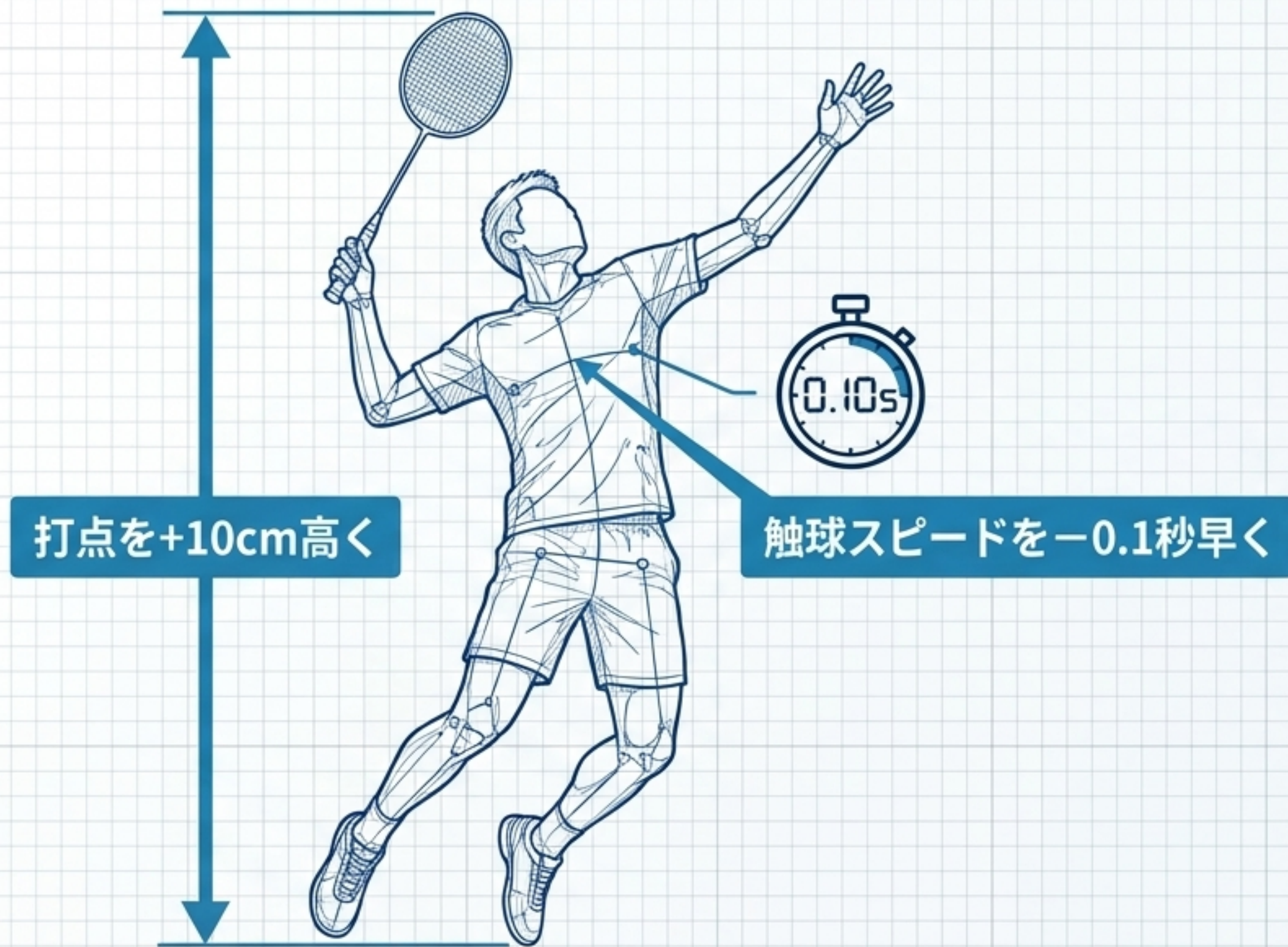
不確定で誰にも読めない泥沼

【一流の視点：物理】



他人の脳内などという幻想を捨てよ。客観的で冷徹な物理的事実だけを見つめ、
『時間』という隙を物理的に塞ぐことだけを思考せよ。

■ 実践指針：1,000回のフェイントより、10cmと0.1秒の変革



フェイントが必要になった時点で、自分の打点の低さを疑え。

打点が落ちて触球が遅れた時に初めて『時間』という隙が生まれ、その穴埋めとして『騙そう』という安易な発想が湧き出る。

相手の都合に関係なく時間を直接削り取る絶対的な技術(体幹・足幅・準備)に命をかけよ。

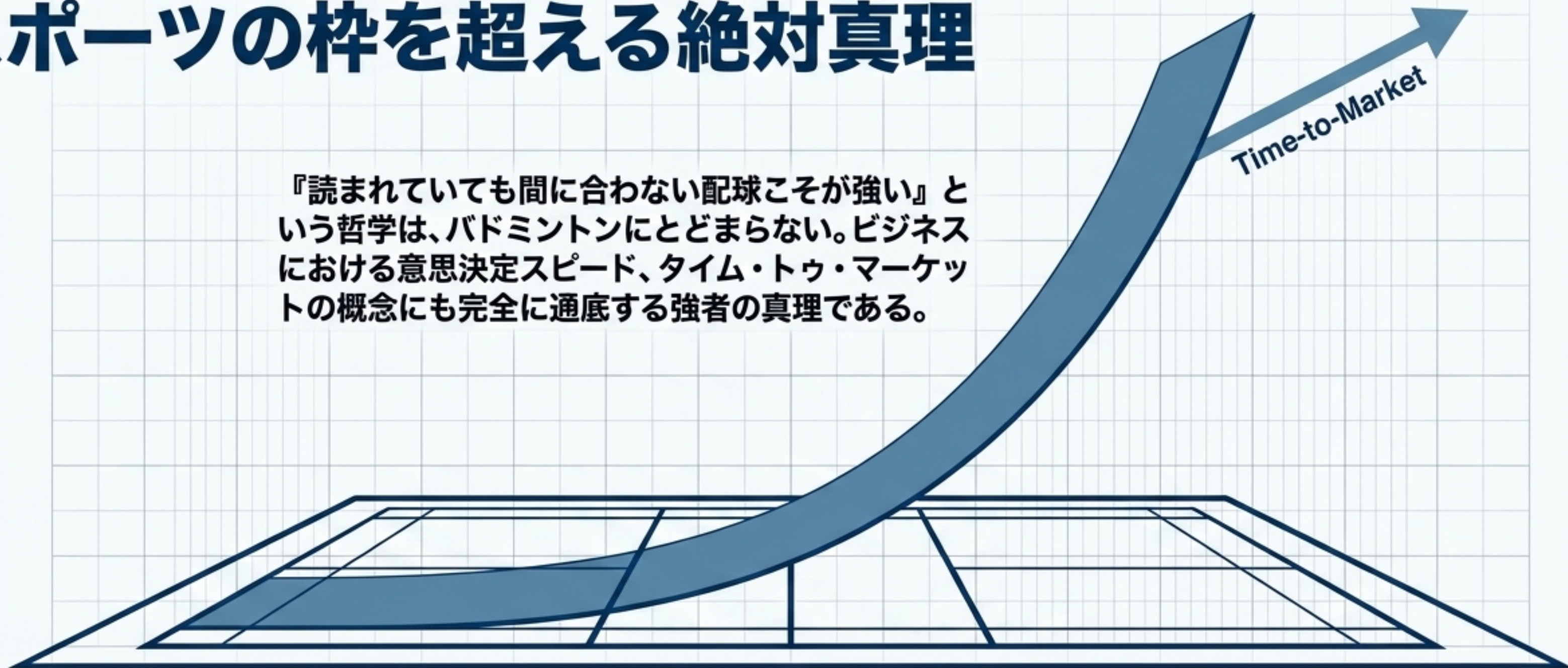
【自己診断】 本質を見失っていないか？

☐	 1. 今使おうとしているフェイントは、落ちた打点を誤魔化すための『逃げ』になっていないか？
☐	 2. 相手の『心理』というあやふやなものに期待し、物理的な『時間短縮』を怠っていないか？
☐	 3. 自分の打点をあと10cm高く、準備を0.1秒短縮するために体幹と足幅を意識できているか？

騙し方を磨く前に、自らの物理的劣勢を疑うことこそが本質への第一歩である。

時間を支配する者： スポーツの枠を超える絶対真理

『読まれていても間に合わない配球こそが強い』という哲学は、バドミントンにとどまらない。ビジネスにおける意思決定スピード、タイム・トゥ・マーケットの概念にも完全に通底する強者の真理である。



華やかな演出を捨て、0.1秒と10cmの泥臭い物理的優位を磨き上げる覚悟を持つ者だけに、真の一流の領域が開かれる。正解を実行するための時間すら残さなければ、勝利は常にあなたの手の中にある。